1部70円（税抜き）

対がん協会報

第617号　2014年（平成26年）12月1日（毎月1日発行）

公益財団法人 日本対がん協会　「日本対がん協会」と「対がん協会」は登録商標です
〒100－0006　東京都千代田区有楽町2－5－1　有楽町センタービル（マリオン）13F
☎（03）5218－4771　http://www.jcancer.jp/

主な内容
2面　遺贈セミナーを初開催
3面～5面　がん教育
島根県の取り組み
出張授業レポート
8面　ピンクリボンフェスティバル開催報告

がん死亡確定数は36万4872人　前年より約3900人増

目立つ肺、膵、乳の伸び　膵臓がんは第4位に　2013年厚労省人口動態統計（確定数）

9月11日付で厚生労働省が公表した人口動態統計（2013年・確定数）によると、昨年1年間にがんで亡くなった人は36万4872人で、前年より3909人増えたことがわかった。全死亡者数は126万8436人で、死亡総数に占める割合は28.8％と、3.5人に1人がんで亡くなった計算になる。1981年以来日本の死因のトップを続けている。

がんの部位別にみると肺がん、膵臓がん、乳がんの増加ぶりが目立つ。肺がんは7万2734人で前年に比べて1216人の増加、膵臓がんは3万672人で同じく756人、乳がんは1万3230人で613人の増加となった。

主な部位別のがんの死亡数を男女別にみると、男性では肺がんが最も多く5万2054人、次いで胃がんの3万1978人、大腸がん2万5808人、肝臓がん1万9816人と続く。前年との比較で増加が著しいのは肺がんで682人増えた。大腸がんも279人増加している。一方で胃がんと、肝臓がんはそれぞれ228人、244人減少している。

女性では大腸がんによる死亡数が最も多くて2万1846人、次いで肺がんの2万680人、胃がん1万6654人、膵臓がん1万4799人、乳がん1万3148人と続く。前年に比べて増加が著しいがんは、乳がんと肺がんだ。乳がんは前年より619人、肺がんは534人と目立って増えている。特に乳がんは近年の急増ぶりが続いている。

近年増加が著しい膵臓がんは、男女合わせた死亡数で3万672人とすでに肝臓がんを抜いて4位、男性では肝臓がんに次ぐ1万5873人だが、伸び方は著しく、前年に比べて356人も死亡数が増えている。この傾向は女性でも同じで女性では1万4799人と、すでに4番目に死亡者の多いがんとなっている。膵臓がんが早期発見が難しく、治療が困難ながんの一つであることを考えると、これは大変大きな問題と言えよう。

主な部位別にみたがんによる死亡数＝厚生労働省の人口動態統計より（全て確定数）

	1965	1975	1985	1995	2005	2010	2011	2012	2013
男									
胃	28,636	30,403	30,146	32,015	32,643	32,943	32,785	32,206	31,978
肝	5,006	6,677	13,780	22,773	23,203	21,510	20,972	20,060	19,816
肺	5,404	10,711	20,837	33,389	45,189	50,395	50,782	51,372	52,054
大腸	3,265	5,799	10,112	17,312	22,146	23,921	24,862	25,529	25,808
女									
胃	17,749	19,454	18,756	18,061	17,668	17,193	17,045	16,923	16,654
肝	3,499	3,696	5,192	8,934	11,065	11,255	10,903	10,630	10,359
肺	2,321	4,048	7,753	12,356	16,874	19,418	19,511	20,146	20,680
乳房	1,966	3,262	4,922	7,763	10,721	12,455	12,731	12,529	13,148
子宮	6,689	6,075	4,912	4,865	5,381	5,930	6,075	6,113	6,033
大腸	3,335	5,654	8,926	13,962	18,684	20,317	20,882	21,747	21,846

がん相談ホットライン　祝日を除く毎日
03-3562-7830

日本対がん協会は、がんに関する不安、日々の生活での悩みなどの相談（無料、電話代は別）に、看護師や社会福祉士が電話で応じる「がん相談ホットライン」（☎03-3562-7830）を開設しています。祝日を除いて毎日午前10時から午後6時まで受け付けています。相談時間は1人20分まで。予約は不要です。

医師による面接・電話相談（要予約）
予約専用　03-3562-8015

日本対がん協会は、専門医による面接相談および電話相談（ともに無料）を受け付けています。いずれも予約制で、予約・問い合わせは月曜から金曜の午前10時から午後5時までに☎03-3562-8015へ。相談の時間は電話が1人20分、面接は1人30分（診療ではありません）。詳しくはホームページ（http://www.jcancer.jp/）をご覧ください。

遺贈セミナーを初開催

高まる社会的ニーズ 大阪でも１月17日に開催

公益財団法人日本対がん協会は11月８日、東京・中央区の朝日新聞東京本社内で、「遺贈セミナー～がんと人間と社会～」を初めて開催した。

遺贈とは、遺言書によって自身の財産の受取人や内容を指定すること。ここ数年、自分の死後に財産を「がん征圧」に役立てて欲しいと、遺贈を希望する声や問い合わせが増えている。また、近く相続税の基礎控除が引き下げられることもあり、相続税対策としても関心が高まっている。

そこでこうした要望に応えて、遺贈による寄付の仕方や、遺言書の作り方などを詳しく説明するセミナーを開催する運びとなった。

セミナーは日本対がん協会の垣添忠生会長による講演「がんと人間と社会」と、三井住友信託銀行財務コンサルタント峯口文治氏の講演「相続と遺言・遺贈」の２部構成で行われた。

垣添会長はがんの基礎知識を説明した上で、がんの種類を「予防できるがん」「早期発見できるがん」「治療できるがん」「治せないがん」の４種類に分類して詳しく解説し、がん検診を受けることや、早期発見の重要性を強く訴えた。

その上で、自身の最愛の伴侶をがんで失った時の悲しみと、がん征圧のために対がん協会等に遺贈することに決めた経緯を率直に語り、会場の参加者たちは熱心に聴き入った。

講演する垣添忠生日本対がん協会会長

峯口氏は相続が発生したときに必要な手続き、そこで予想される様々なトラブル・負担の実例、遺言が家族・相続人の精神的・物理的負担を軽くすること、遺贈が相続税対策にもなること、などを具体例を挙げてわかりやすく解説した。その上で、遺言の内容を確実に実現してくれる、遺言執行者として信託銀行を活用することを勧めた。

講演終了後には同行の担当者が個別相談に応じるコーナーが設けられ、参加者は熱心に質問をしていた。

遺贈セミナーは来年１月17日に大阪でも開催される。

※ご希望の方に左の「遺贈についての冊子」を差し上げます。お申し込み・お問い合わせは03－5218－4771（遺贈セミナー係）まで。

遺贈についてまとめた小冊子

遺贈セミナー 参加者募集

講演会「がんと人間と社会」垣添忠生ほか

日時

1月17日㊏　先着80名様 相談会あり

開場 12:30／開会 13:00／終了 16:00

会場

中之島フェスティバルタワー12階「アサコムホール」
四つ橋線「肥後橋」駅、中之島線「渡辺橋」駅直結

講演内容

第1部　「がんと人間と社会」
日本対がん協会会長　垣添忠生

第2部　「相続と遺言・遺贈」
三井住友信託銀行　財務コンサルタント　山極元穂

●お申し込み先（締切12月16日）
郵送またはFAXにて下記までお申し込み下さい。
住所：〒100-0006
東京都千代田区有楽町2-5-1 マリオン13階
日本対がん協会「遺贈セミナー」係
※住所・氏名・電話番号・参加人数を明記の上、お申し込みください。
FAX：03-5222-6700

公益財団法人 日本対がん協会　Tel 03-5218-4771　http://www.jcancer.jp/

遺贈って何？

「遺贈」とは、遺言書によって、ご自身の財産の受取人やその内容を指定することです。遺贈は遺言書を残すことによって可能になります。

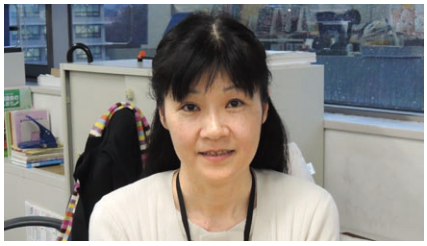
遺言書は個人の遺志として、民法が定める法廷相続の規定よりも優先されます。遺言書が無い場合には、財産は法律によって定められた親族に、法律によって定められた割合で分割相続されます（＝法定相続）。法定相続人がいない場合、遺産は国のものになります。

遺言がお勧めと思われる例

●両親や子どもがいないご夫婦
●独身の人
●内縁の妻（夫）に財産を残したい人
●子どもではなく孫に財産を残したい人
●特定の子どもに、より多くの財産を残したい人
●財産を社会に役立てたい人（公共機関、公益法人、母校などへの寄付）
●資産家、地主、農家、事業経営者、アパート経営者（財産分与や相続税対策で悩んでいる人）

シリーズがん教育❸　島根県　県主導で様々なモデル授業を実施

がん教育を学校現場でどのように取り入れるかはまだまだ手探りの段階にある。各自治体も、本格的な導入を前にそれぞれ試験的な取り組みを行っている。全国の都道府県で最初に「がん対策推進条例」を制定した島根県では、７月に日本対がん協会主催で実施した江津市立青陵中学校での出張授業以降、県が主導してがん教育を実施している。島根県健康福祉部がん対策推進室の藤井麻由美さんに、島根県の取り組みをお聞きした。



がん対策推進室の藤井麻由美さん

島根県におけるがん教育は、保健所が学校などの依頼でがん患者さんの講演会を実施した例はありましたが、県が主体になって学校現場で本格的に実施したのは７月の青陵中学校が初めてです。

元々は対がん協会に「ドクタービジット」を依頼できないか相談したのがきっかけで、今年になって出張授業を希望する学校を募ったところ10校から手が上がり、その中の１校が青陵中学校でした。

青陵中学校では対がん協会の協力で東京から佐瀬一洋順天堂大学大学院教授に来ていただき、中学２年生全員を対象に多目的ホールで講演会方式で実施しました。その際の生徒の反応やアンケート結果、授業後に地域の学校や保健関係者の意見交換会で出た意見を参考に、この秋県独自に高等学校２校でがん教育を実施することになりました。

実施する高校は、希望校の中から松江市の私立開星高等学校と浜田市の県立浜田高等学校定時制・通信制を選びました。色々バリエーションを持たせようと考えたからです。

開星高校は２年生全員の３クラス116人を対象にして、まず全員が講堂で医師の講演を聞き、その後各教室に戻って、３名のがん体験者の方々からそれぞれ体験談を聞くという２部構成にしました。これは青陵中学での反省も踏まえ、大教室と少人数での授業の良い所どりをした形です。

クラスでの授業の運営は担任に任せたので、多少ばらつきが出るという課題もありましたが、先生方からはいつもの授業にくらべて生徒の視線が違うという感想をもらいました。講師の医師は島根県環境保健公社（対がん協会島根県支部）の足立経一先生です。

浜田高校の場合は定時制課程の昼間部の生徒たち１～３年生の24人が対象です。定時制課程は単位制の高校で、小中学校で不登校だった生徒たちが多く通っています。年齢も10代～40代と幅が広く、通常の中学高校とは異なるアプローチが必要です。

今年度はこの３校でモデル授業を実施し、年度内に色々な事例をまとめて情報交換を行う場を設けて、来年度以降につなげたいと考えています。

今後の大きな課題は、がん教育を行う人材（講師）の発掘、育成と、島根県オリジナルの教材の開発です。県内津々浦々の学校でがん教育を実施していくためには、地元の人材の育成が欠かせないのと、著作権などの関係もあり既存の教材を簡単に使えないという事情もあるからです。県独自のがん検診啓発サポーターの活用など、既存の事業も活用していく予定です。

先生劇団も登場。生活習慣切り口に定時制課程でがん教育
島根県立浜田高等学校定時制課程・昼間部

11月19日、浜田高等学校定時制・通信制でがん教育の授業が行われた。授業は総合的な学習の時間を利用して、キャリア教育の位置づけで実施した。

対象となる定時制課程・昼間部は小中学校時代不登校だった生徒が多く、昼夜逆転、ゲームやネット漬け、孤食や偏食、コンビニ食ばかりと生活習慣の乱れが深刻だ。正しい生活習慣の大切さを学ぶという側面からがん教育にアプローチした。

課題に取り組む生徒たち

授業は２コマを使い、導入は先生劇団による寸劇。生活習慣が乱れた女子高生やドクターに扮した教諭たちの、「あるある会話」に生徒たちは大うけ、耳の痛い授業にすんなり導いた。

続いて浜田保健所長で医師の中本稔氏が、がんの正しい知識を事前アンケートの結果を用いながら解説。将来はぜひ医療関係へ進んで欲しいと結んだ。次にがん体験者の竹田美代子さんが36歳で乳がんになって以来の経験と思いを語った。

まとめとして、生徒たちには健康的な生活を送るためにできることを、用意した付箋に書いてもらい発表した。「運動する」「好き嫌いをしない」「少しでも変だと思ったら病院に行く」など、様々な意見が出た。

授業を企画した石川恭子教諭と沖田美緒子養護教諭は「とにかく生徒たちの生活習慣の乱れは深刻です。それでも学校に通えるようになったというだけで、小中学校時代の先生には驚かれるぐらい。何とか少しでも考えてくれるようになれば」と話した。

左から石川恭子教諭と沖田美緒子養護教諭

がん教育レポート

出張授業シーズンの秋、対がん協会でも新たに２校でがん教育の出張授業を行った。１校は文科省のがん教育モデル校である群馬県立前橋女子高等学校。もう１校は三重県伊賀市の県立上野高等学校で、総合的な学習の時間の一環として学校独自で実施した授業へ協力した。２つの事例を紹介する。

三重県立上野高等学校
上野市で初の試み　講義とグループワークを実施

上野高校は忍者の里で有名な伊賀市の上野丸之内に位置する。壮麗な白鳳門を通り抜け、藤堂高虎の築城で有名な伊賀上野城に続く高台の中腹に立地する。城のお堀と石垣、天守閣を背景に、構内には白亜の洋風建築「明治校舎」もあり、部活動の部室として今も活用されている。その上野高校で2009年に新設された理数科の３年生38人を対象に11月12日、日本対がん協会主催のがん教育の出張授業が実施された。

きっかけは同校理数科３年副担任の河井隆志教諭からの電話だった。河井教諭は総合的な学習の時間も担当しており、「命について考え、より良く生きるためにはどうしたら良いかを考える授業」を模索していた際に、朝日新聞に掲載された「ドクタービジット」の記事を思い出し、対がん協会に相談した。

対がん協会は講師の紹介などに協力するとともに、上野高校１校での取り組みに留まらず、今後の広がりに主眼を置いた。そこで、市や県のがん対策部門や教育委員会、近隣の保健師や養護教諭などにも広く参観を呼びかけ、意見交換の場を設けることを提案。また１クラスという規模を生かして、講義の後にグループワークを実施して、生徒たちが主体的に学習できるよう河井教諭と授業内容を練った。

グループワークでディスカッション

上野高校は普段から総合的な学習の時間でグループワークに力を入れており、講義は対がん協会、グループワークは上野高校側が主導するというコラボレーションが実現した。

講義を行う佐瀬一洋教授

当日の講師は順天堂大学大学院の佐瀬一洋教授。７月の島根県の清陵中学校での講演に続く２回目の出張授業となる。佐瀬教授は循環器の専門医であり、自身も骨軟部肉腫という症例の少ないがんを発症し、手術の前後２年間にわたって抗がん剤による治療を受けた経験を持つ。

今回は講義時間が１時限であり、事前にがんについての予備学習も行っていることから、がん体験者としての経験を中心に話した。

また、日本のがん検診の受診率が先進国の中で最低水準にあることや、正しいがん情報を見極めるためのリテラシーの大切さを強調した。最後に生きていることへの感謝の気持ちを述べ、チーム医療の時代なので色々な職種の需要があることを強調。興味のある人はぜひ医療従事者を目指してくださいと呼びかけた。

２時限目はまず冒頭で佐瀬教授との質疑応答。その後３、４人ずつのグループに分かれ、河井教諭の進行でグループワークに移った。最初は静かな印象だった生徒たちだが、質疑応答になると「なぜがんにかかりやすい人がいるのか」「治療はするなと言う人もいるがどちらが正しいのか」「闘病中は誰が支えてくれたか」など次々と質問が出て時間が足りないほどだった。

グループワークは７分間と時間を切って、講義で特に印象に残ったところをまとめたうえで、自分たちにできることを話し合い、発表者を決めて班ごとに発表した。

「サバイバーのケアが大事」「受診率が低いのが印象に残った。こういう機会に自分たちも勉強しなければ」「がんに関わる人がすごく多いので驚いた。患者の精神面のケアも大切だと思った」「知識を持った人が、半端な知識の人に教えてあげることが大事」「お父さんに煙草を止めてくれとすぐに言う。長生きして欲しいから」「がん細胞の不死身と言う性質に注目して、良い薬を作るために使えれば良いと思う」など、バラエティに富んだ意見が発表された。

当日は朝日新聞、中日新聞、NHK、地元伊賀上野ケーブルテレビなどが取材に訪れ授業の様子が報じられた。今回の取り組みがきっかけとなって、三重県でもがん教育が広がっていくことを期待したい。

河井隆志教諭の話

今回は３年生という受験勉強真最中の生徒たちが対象でしたが、目先の受験勉強とはまた違った話が聞けて良かったのでは。質問があんなに出たのには驚きました。

理数科ではグループワークに特に力を入れています。生徒に感想を書かせると、日頃友達同士で真面目に話さないから「こんなことを考えているんだ」と、友達の新たな面を知って新鮮なようです。

総合的な学習の時間の担当はもう３年目。常にテーマ探しで頭を悩ませています。今回は今後生きていく中で、一生役に立つことを考えました。

群馬県立前橋女子高校 文科省モデル事業指定校での実践に協力

群馬県の前橋女子高等学校では、10月29日にがん教育の出張授業が行われた（主催：群馬県教育委員会、協力：日本対がん協会）。群馬県は文部科学省の平成26年度モデル事業「がんの教育総合支援事業」のモデル地域に採択され、伊勢崎市立第一中学校と県立前橋女子高等学校がモデル事業実施校に指定された。

県はモデル事業を実施するために、研究者や医師会、患者団体、ＰＴＡ、養護教諭、保健所関係者などからなる協議会と、指定校の教諭や市や県のがん対策部門、県教育委員会などで構成する検討委員会を設けて、モデル事業に取り組んできた。

具体的には教職員対象のがんの教育についての研修、学校におけるがんの教育の実践、指導資料の作成、がんの教育に関する講師一覧表の作成などだ。今回の出張授業はそのモデル事業の一環として計画され、日本対がん協会が協力した。

当日の講師は山王病院副院長で呼吸器センター長の奥仲哲弥先生。モデル校での実践は、川崎市の中原中学校に続き２回目だ。１年生325名全員が体育館に集まり、講演会形式で１時間の授業が行われた。

奥仲先生はまず生徒たちにクイズを出しながら、手際良くがんの基礎知識を説明した。続いて専門である肺がんの診断と治療法について詳しく解説。特に手術に関しては、動画も見せながらいかに技術が進み、手術が低侵襲で身体の負担が少なくなっているかを、人気のテレビドラマの話題なども織り交ぜてわかりやすく解説した。

昔は30センチ切らなければいけなかった手術が今は４センチで済むことや、出血はわずか20CC程度であることなどを話すと、生徒たちも俄然興味がわいた様子だった。手術の話の流れで、喫煙者の手術がいかに難しいかということから煙草の害にも触れた。

最後に医師の仕事は皆が思っているよりずっときつい仕事だけど、ただ勉強ができるから医師を目指すのではなく、困っている患者を助けてあげたいと思う人こそが、ぜひ医療系に進んで下さいと熱いエールを送った。

講義する奥仲哲弥先生

続いての質疑応答では、「遺伝子検査についてはどう思うか」とか「身内に子宮頸がんを患った人がいるが、再発率はどのくらいなのか」といった、かなり専門的な質問が寄せられた。最後に生徒代表が「がんについて誤解していた。家族や身内に今日の話をぜひ伝えたい」と挨拶した。

その後、同校新聞部が奥仲先生にインタビュー。全校生徒や保護者への啓発につなげた。

意見交換会　予習あればさらに効果的。意外に好評な手術シーン

講義の後は県や市の教育委員、県がん対策推進室、教諭や養護教諭などの学校関係者や保健師など20名あまりが出席して、熱心に感想と意見交換が行われた。

「構成がとても良かった。手術場面の動画もリアルで良かった。眠気覚ましになったのでは」「手術動画を解説しながら見せてくれて良かった」「（刺激的な映像に）配慮するかは意見がわかれるところだが、若い子は意外と平気。早期発見の大切さに力点を置いていたのが良かった」「女子高生の本物を見抜く眼力はすごい、手術シーンはかえって説得力があった」「ただし事前に見たくない人は見なくても良いと呼びかけることは必要」など様々な意見が出た。

今回の授業を中心になって運営した前橋女子高校養護教諭の塚本晶子先生は、「非常に面白く１時間では勿体なかった。うちの生徒なら２時間でももったと思う。できれば事前に保健の授業で予習していると、さらに良かったと思った」と話す。

奥仲先生は「予習してもらうと再初の基礎知識部分を省略できる。その分マンモグラフィの実態や、オペ映像などを増やせる。初期編、応用編と分ける方法があるかも知れない」などと答えた。

最後に群馬県教育委員会の新井孝弘氏が、「今年は２校だけでの実践だったが今後拡大していきたい」と述べて閉会した。

奨学医レポート

最先端の膵・胆道癌診療の現場に触れて

〈愛知県がんセンター中央病院　消化器内科　稗田　信弘〉

私は、平成20年に大阪医科大学を卒業した後、滋賀県にある大津赤十字病院で初期研修を２年、その後、消化器内科として４年間勤務しました。平成26年４月より愛知県がんセンター中央病院で研修をさせていただいております。

愛知県がんセンターの胆膵チームには、超音波内視鏡の第一人者とも言える山雄健次部長を中心に５名のスタッフがおられ、日本でトップレベルの超音波内視鏡（EUS）検査数を誇ります。もちろん、内視鏡的膵管胆管造影検査（ERCP）やそれに関連する内視鏡治療も多く、平成25年度の検査数はEUS667件、超音波内視鏡下生検（EUS-FNA）395件、ERCPや胆道ドレナージなど429件でした。膵・胆道癌の化学療法や治験・臨床試験の数も中部地区では上位を占めます。

また、当院には多数の海外研修生や全国各地からの研修生、見学生が共に学んでおり、日々、お互いに切磋琢磨しながら多くのことを学んでいます。現在はレジデント７名、海外研修生としてタイから２人、中国から１人来日しており、また、他病院から定期的に２人の先生が研修にこられています。

当院で研修を始めてからは、驚きと感激の毎日です。EUSでは、今までに経験したことがなかった系統だった描出法や病変の詳細な観察方法を見て、学んで感動しました。また、超音波内視鏡下胆管十二指腸吻合術（EUS-CDS）や超音波内視鏡下胆管胃吻合術（EUS-HGS）など限られた施設でしか行われていないような治療も数多く経験させていただきました。

ERCPではほぼ全例が担癌患者さんであり、通常のERCPと比較しても難易度が高く、病態も複雑です。症例ごとにアプローチ法が異なり、診断からステント留置などの治療に至るまでのプロセスを考えながら術者をしている時はもちろん、検査を見ている時も非常に勉強になります。また、化学療法に関しては一般病院ではまず経験し得ないような、多数の臨床試験や治験なども経験できました。

日常の診療に加えて、外科、放射線科・IVR科との合同術前カンファレンスや、病理医、外科医放射線科医との合同病理カンファレンスなども充実しており、プレゼンテーション能力のスキルアップ、病態のさらなる理解など得るものが大きいです。学会発表や論文作成も厳しいチェックが入ります。日々の仕事は多忙ですが飲み会もあり、すべてが楽しく、勉強になります。

山雄部長を含め、スタッフの先生方もとても気さくな方が多く、丁寧に指導してくださいます。当院での研修を今後の臨床に、さらには日本の癌治療にいかせるように、これからも日々精進していきたいと思います。

奨学医レポート

婦人科腫瘍医の重要性を痛感

〈近畿大学医学部　産科婦人科教室　村上幸祐〉

近畿大学医学部附属病院の産婦人科は、人口の多い南大阪エリア唯一の大学病院であり、婦人科がんの患者さんがたくさん集まります。この半年間、手術や外来・病棟診療に明け暮れ、その合間に参加する学会活動も含めて非常に多くのことを学ばせていただきました。

婦人科がんは、胃がん・大腸がんや肺がんなどと比べると患者数自体は少ないですが、子宮・卵巣は女性にとって妊娠出産やホルモン分泌に関与する非常に重要な臓器であり、病気によってライフスタイルを大きく変化させてしまいます。比較的若年者に発症することも多く、妊孕性の温存やホルモンバランスの変化など治療の上で難しい問題がたくさんあります。

特に、子宮頸がんは検診が少しずつ普及し、罹患患者数が減ってきたとはいえ、欧米と比較してもまだまだ検診受診率は低く、進行してから発見される方がたくさんおられます。若年発症も増加しています。早期に発見された場合には妊孕性を温存することも可能ですし、子宮摘出が必要な場合でも比較的切除範囲が少なく、放射線治療や抗がん剤治療などの術後補助療法も不要なことが多いです。また近年では技術の進歩により、実施できる施設は限られますが腹腔鏡手術やロボット支援下手術など、おなかを大きく切らなくてすむ低侵襲手術も可能です。

一方、ある程度進行して見つかった場合は、子宮およびその周囲の組織、リンパ節を含めて大きな範囲を切除しなければならず、また手術での摘出が困難な場合には放射線治療・抗がん剤治療あるいはその併用を行います。当然のことながら、治療に伴う副作用・合併症も起こりやすくなり、再発や転移を起こす危険も高まります。

子宮頸がんは、パピローマウイルスが関与しておりワクチン接種が有効であること、子宮がん検診が早期発見に有効であることが言われています。しかし、世間での認知度はまだまだ低いのが現状です。病気の治療が大切なことは言うまでもありませんが、予防および早期発見は病気で苦しむ人が少しでも減るうえで非常に重要です。予防や検診の意義を広く伝えて行くことも、私たちのきわめて重要な役割であると感じています。

お産を扱う産婦人科医の減少が社会問題となって久しいですが、子宮がん・卵巣がんなどを専門に扱う婦人科腫瘍医も不足しています。そのような中で、少しでも婦人科腫瘍で苦しむ人が減るように、助けになれるように、研鑽を重ねたいと思います。

この度研修を支援していただいた対がん協会および関係者の皆様、そして近畿大学医学部産科婦人科学教室の先生方に厚く御礼を申し上げます。

2015年度　日本対がん協会「奨学医」募集中

12月22日締切

公益財団法人日本対がん協会は、国内各地のがん専門病院で研修を受ける若手医師の、2015年度の募集を開始しています。

受け入れ先機関は国立がん研究センター中央病院・東病院など。募集人数は10名前後。研修期間は３か月または６か月で、各50万円、100万円を支給します。締切は12月22日（必着）です。多くの方々の応募をお待ちしています。

この制度は、研修を希望する医師本人が、各病院の研修医やレジデント等の立場で研修先を内定または確定した後に、日本対がん協会に「奨学医」として申請する仕組みです。

がんの予防・診断・治療に関する専門的な知識と技能を研修することによって、がん検診の普及・推進や、日本全国どこでも同じ水準のがん医療が受けられることを目指して1970年に設けられました。この制度を利用して、これまでに170名を超える医師が研修を受けています。

希望者は日本対がん協会のホームページ（http://www.jcancer.jp/）の2014年11月１日付のお知らせから申込書をダウンロードし、必要事項を記入した上で下記に郵送してください。詳細は同じくお知らせからダウンロードできる募集要項をご参照ください。

応募先：〒100－0006東京都千代田区有楽町２－５－１　有楽町センタービル（有楽町マリオン）13階
公益財団法人日本対がん協会（担当：田渕勝雄・坂上桂子）
電話　03－5218－4771

原宿・表参道のヘアサロンに寄せられた募金

リレー・フォー・ライフ・ジャパンに寄付

PEEK-A-BOOのオフィスにて、集まった募金箱と記念撮影

表参道コレクション実行委員会から、リレー・フォー・ライフ・ジャパンに89,289円が寄付された。同会代表のヘアサロンPEEK-A-BOOで11月26日、募金の集計作業が行われ、立ち会ったリレー・フォー・ライフ・ジャパン統括マネジャーの岡本宏之が感謝状を贈呈した。

同会は、商店街振興組合原宿表参道欅会の中で発足した美容部会。国内最大級の美容イベントである表参道コレクションを2000年から主催している。表参道コレクションは原宿表参道地区で開催される４大イベントのひとつ。華やかなヘアメイクショーを見ようと、若者を中心に毎年3000名もの観客が集まる。また、年間を通じて表参道の清掃活動に参加したり、今回のような募金活動を行ったりと、社会貢献活動にも積極的に取り組んでいる。

同会に名を連ねるのは、同地区に店舗を構える16の美容サロン。募金は昨年11月から今年10月までの１年間、各店舗に設置した計25個の募金箱に寄せられた。お客様から「いい活動をしているね」と声をかけられることもあったそうだ。スタッフの中には、自主的にがん啓発グッズを身につけて店頭に立つ人もいたという。

対がん協会への寄付は４回目。過去３回は、認知度の高いピンクリボンから着手しようとほほえみ基金に寄付をした。東日本大震災が起きた後には被災地支援活動に協力。今年は、全てのがんに対して貢献しようという趣旨で、リレー・フォー・ライフを寄付先に選んだ。

活動を提案したPEEK-A-BOOの田中幸広さんは、「自分の周囲やお客様にもがんを経験した方、亡くなった方がいるので、がんは身近に感じている。ときに打ち明けにくい話題でもあるが、このような活動ならみんなが気軽に参加できるのでいいと思った」と話した。同会は引き続き、各店舗で募金活動を行う。

ピンクリボンフェスティバル2014開催報告

乳がんの早期発見・早期診断・早期治療の大切さを訴えるピンクリボンフェスティバル（日本対がん協会、朝日新聞社ほか主催）は、11月８日に大阪で開催した関西セミナーをもって、今年度の全ての日程を終了しました。参加者総数は、延べ１万2000人でした。

綾戸智恵さんのライブを皮切りにスマイルウオーク、シンポジウムを東京で開催（協会報11月号に詳報）、10月18日、19日には神戸でウオーク、シンポジウムを開きました。

神戸大会のゲストはモデルの園田マイコさん、スポーツキャスターの宮下純一さん、そして地元アイドルユニットKOBerrieS♪。マイコさんからは乳がんの体験者として「一人で悩まないで」というメッセージが送られました。甲南病院副院長の宮下勝先生には専門医の立場から検診受診を呼びかけていただきました。出発式は啓明学院高等学校（神戸市須磨区）チアリーディング部の約40名による演技や、KOBerrieS♪のステージで大いに盛り上がりました。

翌日のシンポジウムでは、京都大学の戸井雅和先生、とくしまブレストケアクリニックの笹三徳先生から乳がんの最新治療情報を、岡山大学の内富庸介先生からは精神腫瘍科医として「がんを抱えた時の心構え」についてお話しいただきました。北野病院の田中敦子さんからは、乳がん看護認定看護師として患者さんやご家族に向けた具体的な話がありました。タレントの泉アキ、桂菊丸ご夫妻には、泉さんの闘病中の写真を披露しながら体験をお話しいただき、「笑顔を忘れずに共にがんばりましょう」と力強いメッセージをいただきました。

仙台では25日にスマイルウオークを開催。昨年は台風のため中止となったこともあって、素晴らしい秋晴れの中でたくさんの方にご参加いただけたことが何よりもうれしく感じました。青葉城址をめぐるコースも震災以来ようやく復活。ゲストは歌手のアグネス・チャンさんと大相撲解説者の舞の海秀平さん。東北大学の石田孝宣先生に専門医としてご参加いただきました。東北ゴールデンエンジェルス、センダイガールズプロレスリングなど、地元プロスポーツチーム選手の皆さんにも多数ご参加いただいて、華やかなステージとなりました。

初開催となった関西セミナーは満席の盛況でした。愛知県がんセンターの岩田広治先生に乳がんの基礎知識と最新治療情報を、近畿大学の鈴木彩子先生には婦人科がんについてのお話をお願いしました。埼玉医科大学国際医療センターの大西秀樹先生には精神腫瘍科医のお立場から、神戸低侵襲がん治療センターの橋本理恵子さんからは、がん看護専門看護師としてお話しいただきました。ゲストのアグネス・チャンさんのお話に、会場が笑いに包まれる場面もありました。

今年度は35の企業・団体にご支援をいただき、フェスティバルを開催することが出来ました。今後も検診受診率の向上を目標に、意義あるピンクリボン活動を展開してまいります。

（日本対がん協会ピンクリボンフェスティバルマネジャー　岸田浩美）

	開催日	イベント（会場）	出　演	専　門　医	参加者数
東京	10/2（木）	綾戸智恵ライブ＆トーク（浜離宮朝日ホール）	綾戸智恵	—	410人
	10/4（土）	スマイルウオーク（六本木ヒルズアリーナ）	長谷川理恵 荻原次晴	徳田裕（東海大学）	4,400人
	10/5（日）	シンポジウム（有楽町朝日ホール）	麻木久仁子	中村清吾（昭和大学）ほか	680人
神戸	10/18（土）	スマイルウオーク（東遊園地）	園田マイコ 宮下純一	宮下勝（甲南病院）	3,200人
	10/19（日）	シンポジウム（神戸新聞松方ホール）	泉アキ・桂菊丸	戸井雅和（京都大学）ほか	550人
仙台	10/25（土）	スマイルウオーク（勾当台公園）	アグネス・チャン 舞の海秀平	石田孝宣（東北大学）	2,100人
大阪	11/8（土）	関西セミナー（グランフロント大阪ナレッジシアター）	アグネス・チャン	岩田広治（愛知県がんセンター）ほか	350人

（敬称略）